

星川啓慈 著『宗教哲学論考——ワイトゲンシュタイン・脳科学・シュツツ』

明石書店、二〇一七年

佐藤啓介

本書は、我が国において分析哲学・言語哲学のアプローチによる宗教哲学をリードしてきた著者が、前著『言語ゲームとしての宗教』（一九九七年）、『宗教と（他）なるもの』（二〇一一年）とあわせて、「宗教哲学の三部作」（三六三頁）として刊行した本である。英語圏の宗教哲学ではスタンダードである分析哲学・言語哲学のアプローチは、我が国においては必ずしも盛んであるとはいえず、著者はそうした状況のなか、なかば孤軍奮闘ともいえる姿勢で、このアプローチによって未開拓のままであった宗教哲学の諸問題を開拓し、貴重な研究を世に問いつづけてきた（評者もまた、そこから多くを学ばせていただいた一人である）。その著者の到達点ともいえる本書が、我が国の宗教哲学研究において占める位置は、きわめて重要なものとなるはずである。

本書のタイトル「宗教哲学論考」からは、誰しもワイトゲン

シュタインの『論理哲学論考』を想起せざるをえず、その点については「あとがき」で控えめに記すのみだが、著者の本書に對して込めた想いの重さを感じ取ることができよう。内容は三部構成になっており、副題の「ワイトゲンシュタイン・脳科学・シュツツ」が、その構成をそのまま表している。以下では、本書の内容を各部分ごとに概略したのち、「現代における宗教哲学」という観点からの書評をおこなっていききたい。

本書第一部は「ワイトゲンシュタインの生と哲学」と題され、三章構成になっている。読者は、前著でも展開された、ワイトゲンシュタイン・フィデイズムの立場からの「言語ゲームとしての宗教」論が展開されると予想するだろうが、本書では、その予想を大きく踏み越えた議論が展開されている。著者は、ワイトゲンシュタインがかつて滞在した山小屋を訪問し、また、彼の日記類の草稿を文献学的に精査し、さらには精神医学的ア

プローチをも援用することで、ワイトゲンシュタインという一人の人物の宗教体験ないし「宗教的生」を、復元し追体験しようとして試みている。ここには、読者が一般的にイメージする「哲学者」ワイトゲンシュタインとは大きく異なる、ワイトゲンシュタインの宗教的実存とでもいえるべきものが生々しく提示されている。特に、第二章では、専門外の評者には成否の判断がつかかねるにせよ、『草稿』の手書きの状態まで確認するという徹底した文献学的検討がなされている。そして、そうした裏づけのもとで、『論考』におけるかの有名な「沈黙」を解釈し、『論理哲学論考』とは……(1) 論理学的に言語の限界を明確に確定し、(2) 神について語ることを禁じて「語りえない」宗教の領域を護り、(3) 「語る／示す」「語りうるもの／語りえないもの」という二本の基軸によって独自の否定神学を構築した書物である(一五四頁、傍点強調は省略) という、大胆にして説得的な解釈を提示している。

第二部は「宗教と神経科学」と題され、二つの章が配置されている。第四章は、自由意志の存在をめぐって神経生理学的実験をおこなったリベットをとりあげ、その実験や研究の内容そのものを客観的に論じるといふより、第一部同様、リベットという一人の人物の宗教的生(ユダヤ教信仰)から、学者としての彼の生の営みを捉え返す章である。そこでは「リベットの独特な自由意志の肯定という立場はユダヤ教に由来する」(二三七頁)との結論が提示されている。第五章は、昨今の脳科学の

のようにも思える。

以上、細部までは網羅できなかつたが、本書の全体像を紹介してきた。伝統的な宗教哲学では採用されない多様(かつ先進的)なアプローチが盛り込まれつつ、その核においては、伝統的な宗教哲学の根本的な課題(宗教体験論)に正面から取り組んでいる著作であり、また、ワイトゲンシュタインらの「宗教的生」をありのままに取り出そうとする点において、宗教学的・宗教現象学的著作でもある、といえよう。あるいは、こうした読みが許されるならば、読者は、第三部の祈りの分析を通して理論的に描かれた宗教体験の生き生きとした実例として、第一部で描かれるワイトゲンシュタインの宗教的生を受け取ることが出来る。たとえば「ワイトゲンシュタイン……の日常生活が宗教的な光によって照らされ、意味を与えられている」(二九二頁、傍点強調省略)といった著者のフレーズは、第一部と第三部を理論と実例という関係で理解することを許容してくれるだろう。本書の「まえがき」において、著者は「残念ながら、筆者には「宗教哲学」という学問は現在の世間一般では人気がなくなりつつあるように見えて仕方がない」(二三頁)と危惧している(評者も、その危惧に大いに同意する)。理論研究と実例研究からなる本書は、宗教を哲学の立場から、哲学の分野において考える営みの「面白さ」を存分に伝えてくれる一冊であると評者には感じられた。

ところで、著者が考える「宗教哲学」とは、どのような学問

知見を取り入れ、宗教体験が脳の働きに還元されるか否かという、宗教体験論の根本にかかわる問題が扱われている。著者自身もいうように、あくまで構想仮説段階にとどまるが、宗教体験の自律性に固執する立場と、宗教体験を脳の働きへと還元する立場とを、言語論によって架橋するような神経宗教哲学の方向性が記されている。

第三部は「祈りの分析」と題され、著者の研究の中心にいたシュッツが大きく扱われている。その目的は、シュッツの思想を解釈することよりはむしろ、「祈り」という宗教現象の(おそらく)中核にある体験の分析に対してシュッツの現象学を適用し、祈りにおいて人が何をなしているのかというリアリティを取り出そうとする点にある。著者は、シュッツの現象学的アプローチとワイトゲンシュタインらの言語哲学的アプローチを重ね合わせることで、祈りにおける意識的側面と言語的側面をトータルに扱い、祈りとは「日常生活世界において出現し、この世界のまっただなかにおいて、その有意味な「場」ないし「飛び地」を構成」し(三〇四頁)、「祈る人にとって普段は自明視されている「日常生活世界を異なる光——たとえば恩寵・賜物・救済といった光——のもとで現れるようにさせ、この日常生活世界を祈りの世界から「見通す」(シュッツ)ことを可能にさせる」体験(二二頁)であると結論づけている。この第三部は、つまるところ宗教体験とは何か、宗教とは何か、という問題に対する、著者の長年の思索がたどりついた一つの結論

なのであろうか。「まえがき」において、著者は自身の宗教哲学の基本的な二つの立場を明示している。第一に、体系を志向するのではなく、「理性的な思索を重視する哲学と共同して、宗教的な現象やスピリチュアルな現象を研究する」活動としての営み(一五頁)、第二に、「宗教を、特定の宗教の立場を護るために研究するのではなく、「人間の営み」として、いわば「人間学的に」研究する」営み(一六頁)、この二つの立場が著者のいう宗教哲学であるとうかがえる。その規定自体は至って穩当なものであると同時に、現代において、可能な宗教哲学とは、どのような営みとならざるをえないと評者も同意したい。本書第一部のワイトゲンシュタイン研究などは、まさに一人の思想家の「人間の営み」を徹底的に復元しようとした実践である、とみなすこともできるだろう。また、第二部における脳科学との対話なども、現時点ではまだ具体的な成果こそ出ないかもしれないが、宗教哲学の将来的な課題として、避けられない一つであろう。

だが、他方で、著者の考える宗教哲学の規定に関して、一点検討の余地があるのではないかと評者には思われた。そして、それは著者の宗教観そのもの——そして本書の根幹——にも関係する点である。第三部でシュッツの議論を踏まえて、著者が祈りについて、日常生活世界のただなかにおいて有意味な飛び地を現出させ、日常生活世界を異なる光のもとで見通させる営みであると明らかにしている点は、すでに触れたとおりであ

る。宗教体験の一つの記述として卓抜たるものであり、また体験の意識面・言語面双方のバランスのとれた記述であろう。しかし、他方でここには、著者が宗教体験の世界を日常生活世界と強く区別し、異他なるものとして設定していることもうかがえる。著者も「祈りの飛び地は、その本質が日常生活世界の本質とはまったく異質なものである」として理解できる(三一九―三三〇頁)と述べているとおりである。この点において著者は、宗教の事柄を、他の日常的(世俗的)事柄と区別する伝統的な宗教理解の延長線上に立っている。だが、評者が思うに、宗教の本質論が失効し、宗教概念そのものへの批判を経た現代の宗教研究においては、その宗教/世俗の二分法そのものが根底から問われているのではないだろうか。あるいは、その二分法そのものの発生の起源が問われているのではないだろうか。そして、宗教哲学もまた、そのような地点から宗教を思索する必要に迫られているのではないだろうか。

本書でももちろん、宗教と日常生活世界の単なる二分法が安直に前提されていては、(議論をクリアするために)前者の祈りを一つの「閉じた」言語ゲームとして捉えつつも、宗教的リアリティに照らして日常生活世界が「見通される」という関係性が分析されている(三四三頁以下)。しかし、『論考』を残したワイトゲンシュタインの人間としての営みが、戦場の一兵士であり、論理学・哲学の思索をした生であり、かつ、神に対して語りかけつつ神について

語ることを否定神学的に禁じた生であったように、宗教と日常という二つの世界は、どちらが上位下位ということもなく、実際にはもっと曖昧に即融したものとして考えることもできるのではなからうか。おそらく、これは著者というよりは、それを引き受ける我々の課題であろうが、言語ゲームとしての宗教の「境界」が実際にはどのように揺らぎ、日常生活世界と連続的にどうつながっているのか、といった問題は、これから考えるべき一つの主題、しかも宗教哲学というディシプリンそのものの存亡にかかわる主題であろう。

以上、宗教哲学という学問のあり方という、ずいぶん大きな主題から、不遜な評を述べてしまった。だが、特定の宗教や伝統・文化からあえて一線を引き、分析的で平明な仕方でも宗教体験を理論づけ、かつその実例をワイトゲンシュタインらにおいて鋭く掘り下げていく本書は、我が国における宗教哲学において熟読されるべき一冊であり、また、日々うまれつつける新たなアプローチをどう宗教哲学に導入するかという点でも、一つの模範たりうる本であるといえるだろう。

宗教哲学研究

No.35 2018

宗教哲学会

特集 脳神経科学と宗教の未来

芦名定道 宗教哲学にとっての脳神経科学の意義

冲永宣司 超越的次元のゆくえ——宗教経験の脳神経科学を
ふまえて

井上順孝 宗教研究は脳科学・認知科学の展開にどう向かいあうか

論文

内記 洸 親鸞における「臨終来迎」

須藤孝也 キルケゴールと世俗化

山内翔太 優美と英雄——ラヴェッソンの目的論と神論

長坂真澄 超限と無限——カント及びカントールを経由する
ラズロ・テンゲリのフッサール論

坪光生雄 チャールズ・テイラーの認識論と宗教史——「身体」
をめぐって